

## (財)交流協会 学生交流事業

### 日台青年交流事業（マスコミ志望の大学・大学院生招聘）

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進に重点をおいており、日本・台湾の高校生及び大学生・大学院生の招聘・派遣等の事業を行っております。

本事業は、これら事業の一環として実施しており、台湾でジャーナリズムを専門に学んでいる台湾の大学生・大学院生 20 名を平成 23 年 2 月 6 日から 14 日まで日本に招聘し、日本の報道機関等で取材・編集・報道がどのように報道規範や職業倫理の下で行われているかを見聞することにより、より正確な情報を報道できる記者として成長する一助となることを期待し、実施したものです。

今回招聘した 20 名のうち、男女各 2 名の訪日報告書をここにご紹介致します。

### 2011 年メディア関連学部学生訪日団報告書

台湾大学新聞研究所  
謝怡縈

出発前にはどのような旅になるか考えもせず、帰国してからようやく八泊九日の間続いたドタバタや、食べたり飲んだりしたことを思い返していると、甘い蜜のような素敵な感動ばかりでした。何もかも、交流協会の行き届いたご手配のおかげです。YさんとG先生、Nさんに引率頂き、私たちは思う存分遊び、学ぶことができました。みなさんのご手配は本当に素晴らしかったです。

日本が大好きになりました。

思い返してみると、今回の旅は本当に不思議でした。メンバーとは初対面ですが一緒に出国し、帰国の二三日前になってようやく全員の名前を覚え、お互いに写真を撮りまくっていました。初めによそよそしさからその後の大騒ぎまで、皆がいてくれたから、今回の旅はいっそう素晴らしいものになりました。メディア関連の学科に在籍して

いるという共通のバックグラウンドを持つ私たちは、お互いの学校の先生、学生たちの噂も聞いたことがあり、性格もどちらかというと社交的、だから一緒に過ごすことも簡単でした。とても特別な絆が、この九日間私たちをしっかりと結びつけていました。短い日本での旅でしたが、私たちの友情と日本の思い出はきっと永遠です。いつのまにか、私も日本が大好きになっていました。

一度も日本に行ったことのない私は、そもそも日本に対して何の期待もしていませんでした。日本語もわからないし、ちょっと外国にでも行って羽を伸ばしてこよう、論文も放り出してしまえ、という気持ちでいたのです。前学期末、その頃私はまだ卒業論文のテーマに向けて、混沌した討論の中にいました。インスピレーションも湧いてこない。論文のテーマをどう方向付ければいいのかもつかめず、気持ちがふさぎ込んでいた時期でしたが、ラッキーなことに日本行きの機会を頂き、気持ちは随分楽になりました。しかし、初めのうちには特にワクワクもしていませんでした。卒業、ジャーナリストとしてのキャリアについて、心はずっと疑問を抱え、なかなか答えを出すことができずにいたからです。それでも、今回日本に行っ

たことで、ぱっと気持ちが晴れ渡り、新学期には卒業に向けてもっと力強く前進できると思えるようになりました。日本のメディアから学んだプロフェッショナル魂が、私のジャーナリズムにかけ情熱とエネルギーを奮い立たせてくれたのです。日本に行けて、本当に良かった（旅費の負担も必要なし。本当に超ラッキー）！

日本に行ったことがなければ、本当の意味で日本の「美」と「真」を理解することはできません。日本のあらゆる点に驚かされました。「美」はきれいに整った静かな環境、そしてあらゆる物事に秩序があることから生まれます。そして「真」とは日本人の礼節、奥ゆかしさ、我慢強さと内に秘められた愛（特に長野の農家で出会った私のお父さんとお母さんの M.K さん）から生まれます。そのような社会の雰囲気は平穏で、安らかなところが、生活をしているととりわけ心地よく、安心できました。日本に着いてみると、思いもよらないほど礼儀正しく、サービスを大切にしています。そして謙遜と小さな話声は、確実に台湾よりも優れています。台湾人は大声で話し、公共の場でもマナーが悪くなりがちです。それでも台日関係が良好だからかでしょうか、日本人はとりわけ台湾人を尊重し、心を開いて接してくれました。数日間を過ごす内に、私には日本に対する好感が芽生え、まるで自分の家のように安らげるようになってきました。

#### ・新聞博物館

新聞博物館は日本、ひいては世界の歴史ある新聞を収集し、期間に分けて展示しています。充実した資料、詳細な説明、台湾のマスメディアの管理では考え難いことです。団結力を発揮し国民を教育するという点に関して、日本新聞協会を真似たとして、果たしてこれほどの博物館を作り、国民や業界関係者に新聞を身近に感じてもらい、発

展の歴史を理解してもらうことができるでしょうか。

新聞博物館で、日本初の新聞配達員（東京日日新聞）を目にしました。天秤のような道具を担ぎ、そこに新聞を入れて配達していました。日本初の新聞（横浜毎日新聞）、印刷



機などの道具を目にしました。昔の記者と日本社会との摩擦と理解、衝突と成長を、新聞の実物や、壁に配置された文章や図によって参観者はまるで時代にタイムスリップしたような気分になります。新聞協会は本当に細かいところにまで気を配っていると感じました。残念なことに台湾にはこのような展示はありません。台湾にもこのような博物館ができて、新聞の歴史を記録し、ジャーナリストの仕事に関するエピソードを刻むことで歴史の現場を再現し、教育と伝達というメディアの最も本質的な役割を見直すことができればと思います。台湾の志ある人が新聞の発展史を整理し、実演や展示を通じて国民が触れて理解できるものになり、子供たちも小さな頃から新聞に触れるようになってほしいと思います。

#### ・メディアの見学

日本のメディアを見学できたことは、最大の収穫の一つかもしれません。日本と比較することではじめて台湾のメディアがひどく歪んでしまっていることに気づきました（以前はこれほどひどくはなかったはずですが）、低俗な内容や、プレイスメント・マーケティング、政党の介入、キャスターの誤報や嘘など、台湾のメディアを取り巻く環境は相当に悪く、記者が本来持つべきプロフェッ



シヨナル性を発揮することが難しくなっています。しかし、日本の読売新聞、信濃毎日新聞、NHK、SBC 信越放送など、全国紙、地方紙、あるいは公共放送である NHK などは高品質で、専門性が高く、大いに見る価値のあるものです。記者は客観中立の本分を堅持し、真実を記録し、新聞社の組織も企業や、政府のコントロール、投資の影響を受けないという一貫したポリシーを持っています。

日本のメディアとの対話と相互への働きかけを通じて、私は日本のメディアが社会文化の中で果たしている特質をさらに明確に理解することができました。いわゆる、真実を伝え、中立で客観的な報道のやり方という点に非常に感心し、台湾メディアは学び、手本とするべきだと思いました。しかし、台湾のメディアは過当競争にさらされ、政党の色彩が濃厚であることなど、構造的に先天的欠陥を抱えています。ネットやデジタル時代に引っぱり張られる形で、イノベーションや変革といった方向へ進んでいます。例えば壱電視 (Next TV) はニュースの発展形として、記者のデジタル撮影技術の向上、新型携帯電話、iPad アプリなどを運用しています。台湾のメディア展開の方式は日本よりも多元的で、魅力あるオリジナリティあるものになっており、これが日本と台湾のメ

ディアの相違点であると思います。こうしてみると、日本はかなり保守的で、新聞の不動の地位を固持し、メディアがネットへ向けて速い勢いで発展していく流れに対して何の準備もできていません。今後若年の読者はますます新聞を読まなくなり、ネットなどの情報に乗り換えるようになります。日本が紙の新聞の消滅に立ち向かい、新聞の全面的デジタル化にシフトするのは先進国の中で最後になるのではないのでしょうか。

#### ・日本の着物と茶道

松代の古い日本家屋に入ると、突然時間が巻き戻されて伝統的な日本の時代に戻ったような感覚を覚えます。雪の舞う景色の中で、典型的な良家の女性が日本の着物を身につけ、庭と廊下を行ったり来たりする様は、詩情に満ちています。当日松代に行った時間帯はとても寒く、大雪が降っていましたが、着物を着るといのは貴重な経験であり、私たちは寒さにもかかわらず雪の上で写真を取り、正真正銘昔の日本人に変身していました。年配のお母さん方が自分にぴったりの着物選びをお手伝いして下さり、巧みな手つきで（何層にも重なる服と帯）着物を着せて頂いたおかげで、日本情緒あふれる思い出を作ることができました。

茶道も貴重な経験でした。先生は厳粛で荘重な



様子でお茶を点てられ、一つ一つの動きが丁寧で、きっちりとした形ができていました。お湯の沸かし方、お湯の注ぎ方、火加減、温度、茶碗を持つ技術やコツなど、感心させられるばかりでした。あんこ入りお茶菓子を食べ、一緒に先生の高度な技で点てられた抹茶を味わい、私たちは本当の茶道の味わいと、その精髓を感じることができました。

### ・忘れられないスキー体験

スキーは人生で一番楽しみにしていたことの一つです。台湾では絶対にできないことなので、本当に楽しみでした。期待した通り、美しい雪景色と滑っていくときの快感は、転んでしまったとしても、人を虜にしまうものでした。



飯綱高原の美しい風景は忘れられません。スキーの時間があまりにも短かったのが心残りで、そのことを除けばスキーには本当に満足しました。Yさんがコーチの隣で、私たち日本語能力が最低のA組のために、テクニックや注意事項を懸命に通訳して下さいました。ありがとうございます。私たちが転んでばかりで、くぼみにはまり込んでにっちもさっちもいかなくなってしまうときも、Yさんが手助けして下さい、どんなことがあっても助けて頂いたこと、本当にありがとうございました。そしてみんなでスキーウェアを着た時、とても暖かくて、スキーをしているときも全く寒くありませんでした。あれは一体どこで買えるのでしょうか？生地もあんなに軽くて暖かいなんて、本当に不思議です。

全体的に、スキーはとても楽しかったので今後も機会があればみんなで出かけたり、集まることができればいいなと思っています。

### ・農家でホームステイ

わずか一日半、お世話になったご家族と一緒に過ごしたとが、帰国後も最も気がかりで懐かしい出来事です。一日一緒にただけで、どうしてこんなに別れがたい気持ちになるのでしょうか。M家のお父さんやお母さんご近所さん、そして家の暖かさとお母さんの味、お父さんとお母さんの愛情は口に出さずとも行動から十分に感じられました。私たちが玄関を入るとすぐに中へ入れてご家族に紹介し、日本の伝統的なお菓子（おまんじゅうのような、中に甘い、あるいは塩味の餡が入っ



家族写真



一緒にまんじゅうと餡を作る



雪かき

ているもの) 作りを体験させて下さいました。こたつで暖まり、机いっぱいになだごちそうを食べ、暖かな寝床を用意して下り、雪かきやお参りを教えてもらい、わずか一日の間に笑顔とあいさつで、私とお父さん、お母さんの命が結ばれたのです。機会があれば、また会いたいと思います(次はきっと簡単な日本語の日常会話を覚えて、お母さんの言葉がわかるようになっておきます)。

#### ・大浴場へ

皆恥ずかしがることもなく、誘い合っていっしょに大浴場へ行きました。お風呂に浸かっておしゃべりをし、本音を語り合うのは(素っ裸になっ



ていることがポイント)、相手の話を最もまじめに聞ける時だと思います(相手の話を聞いている時によそ見ばかりしていると、確実にばれてしまうからです)。だから日本の大浴場という入浴方法は、疲れをほぐすと同時に、人間性の試される場なのだと思います。

以下では思い出の写真を振り返ります。



二月生まれ



世新大学のメンバー





## 台湾メディア青年訪日団—交流の感想

台大新聞所  
黄家緯

今回の訪問が私の初来日となりました。以前にカナダ、タイ、シンガポール、中国、香港などを訪れたことがあります。かねてより日本は一度訪れてみるべき国だと思っていました。幸運なことに、交流協会から日本のことを深く理解する機会を頂きました。

同じアジアの国ですが、今回の経験はむしろカナダでの生活に似ていると感じました。きれいな空気、掃き清められた道路、賑やかな街の光景、礼儀正しい人々のおかげで非常に快適で、東京の交通も非常に良かったです。買い物や、グルメ、神社、ランドマークスポットだけでなく、地下鉄で簡単にどこへでも行けること、さらに標示でも英語やたくさんの漢字があり、日本語があまり得意でない私も自由自在に行動することができました。

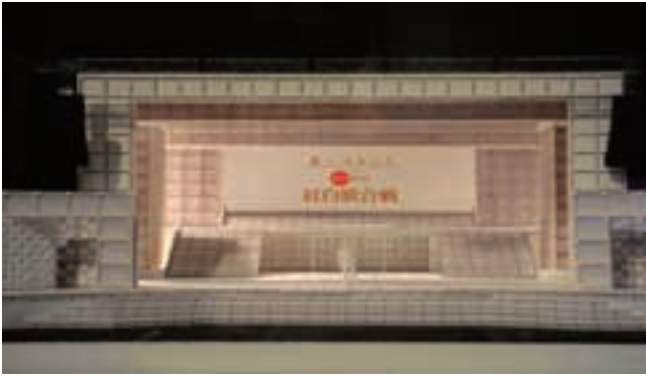


台湾では毎年多くの方が日本へ旅行に行きますが、私たちの日程は日本の全国および地方のメディアを訪問できる点が特別で、このような場所には普通のツアーでは行くことはできません。日本新聞協会は各地の記者、編集者などの報道関係者から組織される大変に重要な組織で、メディア

の自律に関して非常に重要な役割を担っています。印象深かったのは、台湾の記者が記者協会に加入している割合が半分に満たないことで、日本の報道関係者には業務の自主権があり、労働者の権利や職場研修が充実していることがよくわかりました。

日本の公共放送であるNHKは毎年大人気の大河ドラマや番組を放送し、日本で大きな人気を呼んでいるだけでなく、外国にも販売されています。そのためNHKに広告収入はありませんが、日本国民は受信料を自主的に支払っており、一貫して大きな発展を続けられています。これは台湾の公共放送が置かれた状況とかなり異なっています。一つには、台湾の公共放送は往々にして政党や政治勢力によるコントロールを受け、中立の保持や経営に専念することができていないこと、二つ目には、毎年十億にも満たない予算のために台湾の公共放送はそもそも高コストで製作される良質なニュースや番組を制作することができないということが挙げられます。

そのため両国の公共放送のあり方や機能についての立場は大きく異なっており、今回私の一番の感想は、台湾の公共放送が学ぶべきなのは、いわゆるプロフェッショナルの精神や良質の番組であると思います。毎年恒例のNHKの正月特番、紅白歌合戦の視聴率は約50%にも上り、台湾の公共放送にはこれに匹敵する番組は一つもないばかりか、十分の一にも達しません。日本を参考にするには、台湾はまず番組で国民の理解を得る必要があります。多くの視聴者を獲得すれば影響力は自ずから大きくなり、そうなれば広告収入がなくとも社会全体が公共放送を利用し、信頼し、自然と支持するようになります。世論も毎年国が多額の予算を公共放送に投入することを支持するようになり、そこで初めて新たな経営モデルが生まれるでしょう。



公共テレビ以外に、新聞の制作や購読習慣も台湾とは大きく異なっています。一番印象深かったのは日本の高い購読率で、読売新聞の一日約八百～一千万部という販売部数はほぼ世界一位で、日本全国の重要な情報の伝達や、民主政治の運営において重要な役割を果たしています。その理由を突き詰めていくと、日本のマスコミが長期的な視点を持って、各地の小中学に入り込んで無料の新聞を提供し、メディアリテラシー教育を行い、児童や青少年が新聞を購読する習慣を育むだけでなく、生徒たちがニュースの生まれる過程についても、一歩進んだ理解ができるようになっています。

読売新聞が学生の読者層に関心を持ってもらうため、毎日の紙面にピカチュウの学習コーナーを設けていることが強く印象に残りました。この他、各地の新聞やテレビ局も独自のキャラクターを持ち、メディア全体のイメージがより親しみやすいものとなっています。全国紙の大きな発展だけでなく、今回訪問した長野の地方紙、信濃毎日新聞は一日に四十数万部を発行しています。この部数は台湾の全国紙の発行部数に匹敵します。日本人が全国紙だけでなく、地方の公共問題についても、地方紙を通じて関心を寄せていることがわかります。

このことは台湾の地方紙とも大きく異なっています。一つ目には、台湾のコミュニティはいまだ発展段階にあり、地方の公共的事情については関心が薄いことです。そのため地方事情をテーマとする地方

紙には市場がほとんどなく、現在台湾の地方紙には商業として新聞社を営むところはありません。ほとんどが近隣の学校や地域住民が独自に発行しているもので、プロの新聞制作や経営モデルでなければ全国紙と競争をすることは不可能です。しかし、今回訪問した信濃毎日新聞で、プロ意識の高い紙面や、経営陣が自信を持って長野の住民は読売新聞よりも信濃毎日新聞を信用し、頼りにしていると語っていたことを見ると、これはメディアの理想的な発展段階にあるといえるのではないかと思います。

メディアを見学することだけでも十分に貴重な経験だと思っていましたが、むしろ長野でのその後の五日間が忘れられない思い出になりました。長野に行く前日、現地の旅行関連部門の責任者、そして長野のホテルのスタッフの方が東京に来て説明をし、プレゼントと関連情報の載った冊子を下さった親切さが心に残っています。

長野到着後は、ホテルが看板で私たちを歓迎して下さった他にも、松代荘は私たちが下車する前に国旗で歓迎して下さい、とても感動しました。私たちは零下何度という極寒の地にいましたが、心はほかほかと暖まりました。東京とは異なる現代感のある場所で、私たちはスキーをし、着物、抹茶文化、露天風呂の温泉を体験し、地元の美味しい料理を食べて鬼無里の民家に宿泊しました。おそらく今後どれだけお金を払ってツアーに参加しても得ることのできない貴重な経験だったでしょう。





台湾にもお茶の文化はありますが、どう飲もうと全くの自由です。抹茶による茶道文化体験の際、先生やその他お手伝いの女性スタッフの方々のプロ意識がとても高く、一つ一つの細部にこだわっていたことに感嘆していました。茶器を洗い、茶を入れる間、茶碗の方向、そして角度に、伝統文化の美が見られたのです。このような先進的な国が伝統文化を余すところなく保存し、それを観光産業にまで発展させたそのソフトパワーは大きな成功を収めていると言えるでしょう。私たちに着物を着せてくれた先生方は一つ一つの小さな部分にこだわり、私のお腹があまり大きくないところを、先生方は長い時間かけて帯を調整し、昔の将軍に見えるようにして下さいました。伝統的着物を身にまとい、下駄を履き、抹茶とお茶菓子を頂き、雪の降る松代の古城をそぞろ歩きました。これより素晴らしいことが他にあるでしょうか？

鬼無里の農家の生活体験が今回のイベントのクライマックスであったことは間違いありません。私たちは男性四人とも日本語が話せない、あるいは基本的な言葉をいくつか言えるだけだったので、お父さんの車の中ではずっと押し黙り、意思の疎通ができずに緊張していました。しかし、家に入った途端、お母さんと九十二歳になるおばあさんが温かく迎えて下さり、私たちが日本語をわかるかどうかなどお構いなしにずっと話しかけてきて、とても可愛いと思いました。私たちはわかったような顔をしながら、ジェスチャーや目配せ、少しの英語や漢字を使っているうちに、言葉は少しずつ問題にならなくなってきました。私たちはお互いに心でコミュニケーションを取っていたのです。

お母さんにおまんじゅうをごちそうになった後、おばあさんから蕎麦の打ち方を教わりました。

お父さんも納屋を見せてくれたり、羊の餌やりや乗馬、雪かきなどに連れて行って下さり、貴重で珍しい経験ができました。すでに家を出て行ったお兄さんとその奥さん、可愛い娘さんもやってきて、私たちを歓迎してくれました。夜、私たちは紙と鉛筆で漢字を使って日本のアニメやお互いの生活、日本と台湾の違いなどを語り合い、お兄さんにはコマ回しを教わり、お父さんとお母さんからは竹とんぼや鬼の面を頂き、まるでずっと昔から家族だったように思えました。夕食の時、お父さんが「酒はいけるか」と尋ね、私たちは少しなら、と答えました。するとご家族はわざわざ日本酒やビールなど、三四種類のお酒を出して、気前よく振る舞って下さいました。夜の入浴の時にはお父さんとお母さんはどうしても私たちに先に入って浴槽に張ったお湯に浸かるよう言って下さいましたが、私たちは本当に申し訳なくて、浸かることはせずご家族に残しておくことにしました。



翌朝、お父さんとお兄さんに、近くの神社とお寺へ連れて行ってもらい、そこで初めて神社とお寺では参拝のしかたが異なることを知りました。道中お父さんは寒がる私たちを見て、わざわざ停まって道ばたの自販機で温かい飲み物を買って下さいました。自販機は東京の街角にあるものとは大違いで、ボタンは凍り付いて雪まで積もり、選べる商品も多くはありませんでしたが、あの温か

いミルクティーは今まで飲んだ中で一番美味しかったです。その後、午前中私たちは近所の坂道でスノーボードをしました。家にあるボードを持って行ったのですが、数日前に飯綱高原でやったスキーとは全く異なり、スケートボードのように両足を板の上に固定するもので、もう一つは座って滑るものでした。お父さんとお兄さんに隣で指導してもらい、私たちはまるで幸せな子供のようにでした。



長野でも東京でも、遊びや交流の時に引率して下さった Y さん、団長の G 先生、N さん、長野の N さん、通訳の Y<sub>1</sub> さん、そしてもう一人の通訳の方、私たちについてスキーをして下さった名前のわからない先生と、ガイドの方(私うっかりしていました、遠慮していたのか名前も教えてもらえなかったのです)、みなさんが暖かく私たちの面倒をみて下さり、こんなにも充実して楽しい旅ができた一番の理由は、やはりみなさんがいて下さったからでした。遊び呆ける子供たちを引率するのは骨の折れる仕事で、Y さんにはご迷惑をおかけしました。とても上手に私たちをまとめ、たくさん冗談を言って笑わせてくれました。G 先生は学者ですが、遊ぶときには私たちと一緒にハイになっていました。付き添いの日本人の方々のことで驚いたのは、私たちが食事をしている時、一緒に食事をせずに、誠実な様子で片隅に立ち私

ちを見守っていたことで、私はとても申し訳なく思っていました。



今回の旅で私はさらに日本を知り、日本に入り込み、そして日本を愛するようになりました。私たちは一緒に日本語を勉強しようと言い、機会があればまたあの家に泊まりに行きたい、日本語で話がしたいと思うようになりました。そして、今回早稲田大学を訪問して学生たちと交流し、彼らの学生生活をとてもうらやましく思い、さらに台湾と日本を比較したメディア文化の研究をし、機会があれば日本で留学して、早稲田の外国人学生に占める台湾人の人数を増やすことができると思っています。

## メディア訪日団心得回饋

台湾芸術大学廣播電視系  
周士為

暑い夏の日の午後、当時私はまだマレーシアで国際ボランティアをしていました。仕事が終わって帰宅してからパソコンつけ、久しく更新していなかった plurk や facebook を何となく眺めていると、交流協会がメディア訪日団のメンバーを募集していると、友人が伝えていました。こんな機会

を逃す手はないと思い、直ちにサイトをお気に入りに追加し、台湾に戻ったら絶対にこのチャンスをもものにしようと思い、申し込みをしました。

思いもよらないことに、応募をしてから私の日本に対する見方が変わり、人生における豊かな体験の経験が増えました。

以前の私はいわゆる哈日（親日）ではなく、日本について得られる情報はほとんどメディアを通してのもので、日本に対しては、堅苦しい、ユーモアがない、融通が利かない、性産業が盛ん…など、いわゆる固定観念を抱いていました。しかし、これらは私がそれまでに日本に触れたり研究したことがなかったために私の心に根を下ろした先入観でした。しかし、今回の訪問を通じて、人情、文化、ファッション、テクノロジーなど、私の日本に対する考え方は一転しました。一人の大学三年生の学生にとって、周囲の人もうらやむような貴重で得難い経験でした。

そうして、旅は始まり、物語が始まりました。

ANAの飛行機は、マスメディアに対する熱意と興味を抱いた二十個の燃える心を乗せて、風に乗って日本の首都、東京へと飛びました。初めて日本の地を踏み、冷たく乾いた空気を吸い込みました。全てが新鮮で、全てはこれから始まります。第一印象は、清潔で、思ったほど寒くありませんでした。東京の最初の夜は、静かで美しく、東京タワーの放つまばゆい光が私たちの宿、東京プリンスホテルを包み込んでいました。その晩、友人と一緒に街をぶらつき夜食を食べている時に、日本はロマンチックだな、カップルや夫婦で行くのもってこいだよ、思わずそうつぶやいていました。

日本の第一印象は、「ロマンチック」でした。

二日目からは、NHK、読売新聞、CBS、信濃毎日新聞、日本新聞協会、新聞博物館そして早稲田

大学と、日本で有名な、専門的水準の高い報道関係機関への訪問が始まりました。まず、今回日本のプロジャーナリストの方に会ってお話をする機会を持てたことを、本当に光栄なことだと思いました。特にNHK Worldへの訪問に興味を覚えました。私には将来ジャーナリストになり、国際的感覚を持った報道人になりたいという夢があります。そのため、一番興奮したのがNHK Worldの見学でした。台湾では多くのテレビ局が性的で暴力的なニュースに満ちており、国際的常識の欠如が深刻です。私は、国際ニュースを取材し、研究することのできるジャーナリストになりたいと思っています。そのため、日本最大の報道機関であるNHKが毎日30分ごとにニュースを放送しているのを目にして、番組の制作を見学したとき、心からうらやましく思うとともに、自分もその一員になりたいと思いました。

NHKの訪問では、その巨大な規模とシステム化された組織に驚かされました。台湾の公共テレビによるニュース番組制作の規模はNHKとは比較になりません。同じく国家の放送機関でありながら、これほどまでに異なることに、台湾の報道制度や組織に深刻な欠落があることがわかりました。資源や経費不足が不足しているのは、良質かつ専門性のある正確な報道などは望むべくもありません。

また、その日の晩、ホテルで休んでいる時に、何となく日本のニュース番組を見ていると、あることに気がきました。日本のニュース(特にNHK)は制作時間が長く、およそ三～五分間あります。台湾のメディアは、TVBSを訪問した経験からいうと、一般に台湾の商業ニュースの編集担当の規定では、ニュース一つの長さは一分半から二分半を主としており、テレビ局は限りある時間内に全てのニュースやその内容を伝えるよう、明文化した規定があります。しかし、日本のメディ

アの放送するニュースはおしなべて完成度が高く、首尾一貫しています。そのときのトップニュースだった相撲スキャンダルを例にすると、テーマ性のあるニュースを制作するとき、台湾は偏った特集を組むことがあり、日本の一般的な毎時ニュースの内容は、厳重なチェックと編集を経て放送されます。台湾の要求する速い、ショッキング、正しい、という態度に比べ、正確性と内容の豊富さに優れています。

NHK のベテラン担当者の方とお話をした際に、NHK のニュースソースはまず地方の記者が情報を提供し、その後東京で編集をした後に放送するというのを伺いました。このようなニュースの制作、放送のやり方は、非常に厳格で道徳的なものだと思います。一本のニュースが制作される過程で多くの人の手を経て、何度もチェックされ、誤りのないことが確認されてから視聴者に向けて放送されるのです。台湾の制作から放送の過程を見てみると、以前私が自ら見てきた経験を例にとると、文章を書く記者とカメラマンが非常に短い時間の中で（午前中に一本のニュースを作り終え、正午のニュースに乗せる必要があります。）約二分間のニュースを完成させなければなりません。そのため、撮影を終えて原稿を書き終えたら、すぐさま局に戻ってニュースを制作しなければなりません。文章は帰り道にカメラマンと編集を話し合い、放送原稿は道中書き上げてしまいます。しかし、このように慌ただしく切迫した状況で、しかも記者とカメラマンの二人だけで一本のニュースに責任を持つと、内容が浅くなりがちで、誤りも発生しやすくなります。その結果、台湾ではニュース制作時間が短く、チェック制度もないので、ニュース制作、放送の番人として、一番受動的な視聴者は事実と異なる情報をつかまされ、ニュースとしての価値を失ってしまうのです。

そのため、NHK の適切な制度を知ってしまう

と、台湾のメディアが過当競争によっていい加減なニュースを制作してしまうのは、極めて残念なことだと思えるようになりました。

また、日本新聞協会を訪問した際に、副社長の方がこうお話しされました。メディアが政府や特定の企業の宣伝道具にならないよう、日本政府は政府や財団が一定の規範を持つよう明文化した規定によって定めています。しかし近年「三中」問題が広く討論されています。すなわち即中国時報、中視、そして中天が旺旺グループに買収され、旺旺グループの握るメディア資源が全台湾のメディアの半分を超える事態になっています。一つの営利企業がメディア資源を独占することが、今後メディアの公正、あるいは正確性に影響を及ぼし、メディアが大企業専用の宣伝の道具になってしまわないのか、という点が議論的になっています。一方日本では、紙に書かれた明文規定によって株式資本の分配を規定し、メディアの公正性に影響しないようになっており、また、メディアの収入が全て広告、売上高および活動の内容が大企業のコントロールを受けなくなっています。

日本での前半四日間はスケジュールがぎっしり詰まっていた収穫も多かったです。メディア関係者や高い地位にある人とお会いしてお話をする中で、重要なことがおざなりにされる部分もありましたが、全体的には大きな成果がありました。

九日間の日程の内、一番印象に残ったのは、やはり田舎で一晩日本の家庭にホームステイができたことでした。本当は出発前には、自分が日本語を全く話せないことで壁ができ、ホームステイ先のご家族との溝が生まれてしまうのではないかと心配していました。また、日本人のこともよく理解しておらず、得られるのはメディアからの一方的な情報ばかりだったので、日本人は内向的で

ユーモアのない人たちだと思いこんでいました。西洋のように感情豊かな話し方に慣れている私は、ご家族と気が合わないのではないかと思っていました。しかし、全ては余計な心配で、ホームステイ先に行って二十四時間後にはすっかり消え去ってしまいました。思い出の全てが、愛と感動で一杯です。

七日目、長野のセンターでそれぞれの家庭への割り当てを待っているときは、ワクワク半分怖さ半分で、手にびしょりと汗をかき、両足はガクガクと震えていました。それでも笑顔は絶やさずにいましたが、Nさんの名前が呼ばれました。その人がこれから二日間、私の日本での父親になる人でした。

私のお父さんはすでに「おじいちゃん」になっていて、お子さんは私たちよりずっと年上で、すでに結婚して独立しているということでした。それでも、やはり私たちはお父さんと呼ぶことにしました。

お父さんの家は昔ながらの日本の家庭で、家ではペットとしてポニーと羊を飼っていました。玄関をくぐると、強い木の香りと畳の香りが漂ってきてワクワクした嬉しい気持ちになってきました。出国前に、私は豪華な内装のホテルではなく、地元的生活にどっぷりと浸かってみたいと思っていたからです。家についたばかりだというのに、お父さんは興奮気味に私たちをペットの散歩に連れて行ってくれました。小さな頃から台北に育ち、そこでの生活に慣れた都会の子供は、そのような光景を目にして、興奮と喜びを全身にみなぎらせているのでした。お父さんは注意深く私たちをポニーに乗せ、そのついでに家の様子を教えてくださいました。

家に入って応接間で一緒に暖まっていると、可愛いおばあさんの姿が現れました。おばあさんは

すでに九〇歳を超えていましたが、言葉は力強く、若者に少しも負けていないと言っても過言ではありません。その後、おばあさんにそば打ちを教わりました。そば粉の混ぜ方、こね方から、塊を細い麺に切るまで、おばあさんの力強さとたたずまいは、まさにプロと呼ぶべきものでした。私たちもおばあさんを真似て生地をこねましたが、やってみるととても難しく、若者たちの作った生地の厚さや大きさは、おばあさんの自然できれいな仕上がりと比較にもなりません。おばあさんは自分の作った生地の塊を、大の男四人がめっちゃめっちゃにしてしまう様子を黙って眺め、傍らで静かに微笑んでいました。

その日の晩、お父さんの息子さん一家も帰ってきて、私たちと一緒に食事をとりました。夕食時の賑やかな笑い声は、今思い出しても不思議です。私たちは四人とも日本語ができないのに、下手な日本語と漢字だけで、お父さん一家と楽しく会話ができていたのですから。お父さん一家のもてなしを受けて、私たちは自分たちが家族として、全く身内のように扱ってくれることに感動していました。お父さんも私たちを息子と呼び、そうした不思議な感覚のためか、お別れまでの時間は本当に早く感じられました。血縁関係もなく、言葉も通じない全く初対面の人たちが、二十四時間も経たない間に国境も年齢も超えた家族になったのです。私が日本文化に触れる前に抱いていた思いとは、大違いでした。日本人は、とても暖かい人たちでした。そしてまた、奥ゆかしく、とても礼儀正しい人たちでした。

しかし、ホームステイ先では、伝統的な日本人の生活の中で、男性は依然として主人として振る舞っていることにもきづきました。夕食の時、お母さんとおばあさんは私たちと一緒に食事をせず、台所で忙しく男たちのために働いていたので

す。もちろん、これは正しいかどうかを問うような問題ではなくて、イスラム国家では、女性は体を布にくるみ、体を露出してはいけないのと同じで、道徳的問題ではなく文化的な差異です。それでも私の目には不可解なこととして映りました。

二日間、お母さんとのコミュニケーションはとても少なかったのですが、私たちのために一番骨を折って下さったはお母さんです。母親の無言の努力の偉大さを思い知りました。そして、日本の伝統社会における男性の権威と、女性の服従に気づ



信越放送を見学



お父さんが家族写真の下に貼ってしてくれた私たちの名前



着物の美を体験、一列目は着付けをしてくださった先生方



並んで割り当てを待っているお父さんたち



家族になりました

きました。

九日間はあっという間に過ぎ去り、日本を好きになり始めたところで離れなければならず、ただ名残惜しいと思うのみでした。充実した九日間を過ごしての帰国、その収穫は日本のメディアと直に顔を合わせての交流だけでなく、同行メンバーとの友情や思いやり、ホームステイ先のご家族との忘れられない思い出です。G先生と交流協会のYさんに感謝申し上げます。今回、メンバーの一員となる機会を頂き、非常に印象深く、大きな影響を受けた旅でした。しかし、作家の楮士瑩が書いたように、旅は素晴らしい人生の代名詞ではなく、素晴らしい人生の第一歩に過ぎません。旅を通じて外の世界を見た後で、人生の第二歩をどう踏み出すのか、それが大切です。ともに努力しましょう。

## 「記者志望学生訪日団」報告書

輔仁大学大衆メディア学研究所大学院  
呉雅琴

初めての出国で、光栄なことに日本のマスメディアの訪問に参加することができました。このたびの機会をお与え下さった交流協会に、心から感謝を申し上げます。今回の訪日で、日本のマスメディアの全体的な運営についての考え方が理解できただけでなく、日本文化の謙虚で礼儀正しく厳粛な態度を深く理解することができました。これも今回の旅行で最も学ぶ価値のあったものだと思います。

スケジュールは非常に過密に思いましたが、交流協会からのお心遣いを感じ、メディアの見学や、学術交流、あるいは農村での体験など、どれも非常に興味深く、特に今回の日程は普通では触れる

ことのできないもので、本当に貴重な体験でした。

その中で、日本と台湾の新聞の違いには、少し不思議さを覚えました。日本の新聞購読率は相当に高く、若年読者の新聞離れという苦境に立たされてはいるものの、いまだ新聞の地位を揺るがすには至らず、発行部数トップの読売新聞をよく見ると、文字が写真より相当多いにもかかわらず、依然として読者を獲得し続けています。逆に台湾の四大紙を見てみると、近年トップを独占しているりんご日報は写真や視覚的刺激を駆使することで勝利を収めていますが、読者の注目を集めるという方法が奏効しているようです。しかし日本では刺激的な画像を使用せずとも、読者は新聞で情報を得ることを望んでいます。このようなメディア環境は台湾とはかなり異なっているといえるでしょう。

また、日本のマスコミもタイムリーな報道を目的としていますが、台湾に比べて日本のマスコミ職員の福利は比較的充実しており、SBC、信濃毎日新聞社を見学したときには職員用の仮眠室、レジャー教室を目にしました。これも台湾に比べて優れている部分だと感じました。

しかし、今回の見学で少し心残りだったこともあります。例えば日本の記者の組合である「記者クラブ」を実際に見学することができなかったこと、あるいは日本の現場記者と直接会ってみることで、台日の報道環境における違いについて交流ができなかったことなどです。また、時間に限りがあったためか、一部の質問に対してメディア側は全てを説明できず、比較的一面的な新聞の運営のプロセスや操作に関する考え方しか理解できませんでした。次の機会があれば、質問時間をもっと多く取り、メディア関係の学生と実務記者が出会い、知り合う機会を設けてはいかががでしょうか。

しかし、今回の日程は日本のローカルのマスコミ

を理解するのに大きな収穫がありました。新聞あるいはテレビ放送だけでなく、あらゆるものに大きな興味を抱きました。見学の時に同行のメンバーたちはテレビ局内のスタジオや番組の収録などに関心を抱き、次々に記念撮影をしていました。特に、キャスター席には一度座ってみたいと思いました。

他にも小さな発見がありましたが、NHK、読売新聞、SBC、信濃毎日新聞などを見学していると、いずれもアニメキャラのようなマスコットがいました。本来マスコミが持つ厳肅さを和らげ、可愛いイラストでイメージづけるというのも台湾のテレビ局や新聞社には見られない変わったやり方だと思いました。

そして、信濃毎日新聞社からは「整理記者」という職種を紹介して頂きました。これも台湾にはないものです。紙面にの載せる記事やその大小を決めるもので、その権限はかなり大きいといえるでしょう。台湾の編集に似ているようです。また、新聞博物館には新聞の一番初期の頃から残された資料があり、きちんと整理されていて、日本新聞が辿った発展の歴史を垣間見ることが出来ます。こうして日本の新聞文化に接近することができたことは非常に刺激的でした。台湾でも新聞文化を少しでも多く保存し、盛り上げていってほし



NHK のスタジオの様子



新聞のレイアウトを初めて体験する。新聞博物館にて

いと思います。

昼間に盛りだくさんのスケジュールをこなした後、夜は交流協会主催の宴会に仰天してしまいました。夕食は非常に豪華で、夜食の心配もなく、本当に交流協会の心遣いを感じました。こんなに豪勢な食事内容に私もメンバーも驚き、「台湾に戻ってからはどうすればいいのか」と思っていました。また、その夜の自由行動時には電車に乗って東京の近場を歩くことができ、日本での生活の楽しさを味わうことができました。

正式な訪問日程が終了してからは、楽しみにしていた着物体験とスキーです。一面の白銀世界である長野で、着物を着て写真を撮ることで、日本の農村の美を感じ、さらにスキー体験はこれ以上ないほどにスリリングでした。装備を身につけると準備万端に見えましたが、実際にスキー場に来てみると、想像したよりもずっと難しいことがわかりました。転んでばかりいた私はインストラクターの方とメンバーたちに助けを求められ、長い時間をかけてやっと一回目を滑り終えることができました。貴重な機会だったので、リフトに乗って二回目に挑戦しました。皆が慣れてしまったのを見たからか、私も怖い気持ちをぐっと抑えてスキーに専念しました。急な下り坂ではやはり転んでしまいま



たが、少しずつコツがつかめて、一回目よりもスキーの楽しさを感じることができました。



最後は今回最も貴重な、長野でのホームステイでした。来るまでは日本の農村について様々な想像を巡らせていましたが、自分が白銀の山で一晩を過ごすことができるとは考えてもみませんでした。人生においても相当に貴重な経験だったと思います。興奮はしながら、緊張もたくさんしていました。日本語がうまくない私は、せいぜい二言三言日常の言葉ができるだけで、どうやって宿泊先のお父さんお母さんと意思の疎通をすればいいのかわからず本当に悩まされていました。しかし、幸いなことに、共にKさんのお宅に割り当てられたメンバーの中に日本語のよくできる人がおり、おかげで私たち三人は宿泊先の家庭環境についてよりいっそう深く理解できました。お父さん、お母さんと生活し、割り当てられたKさん一家は、芸術家肌の家族でした。建物から室内の家具内装にいたるまで、全てお父さんとお母さんの手作りによるもので、木造二階建築は上品でデザイン性も良く、入ってみると年取った白猫とペットのニワトリがいて、また他とは違う風情を添えていました。それだけではなく、街から離れた山間地区であるために生活は不便で、お母さんは食材の供給も一手に引き受けています。体に良く健康的なのはもちろん、美味しさも備えていました。

私たちが到着した後、最初の食事として、ヘルシーなアップルパイをごちそうになりました。言葉は異なっても、簡単な言葉と笑顔だけで、宿泊先の家庭の私たちに対する心配りと、私たちの暮らしに対する好奇心を感じることができました。

農村地域は素朴で、都市とは甚だしく異なっていました。喧噪から遠く離れてこの地で一夜を過ごせたというのは、本当に素晴らしい経験でした。交流協会がこれほどまでに入念なご手配を下さったことに感謝いたします。お別れの時には、今後の人生でまた来るのはとても難しいだろうと思いました。今回の旅で最も特別な経験でした。



最後の一日になると、日本を離れたい気持ちになってきて、まだ離れていないのにすでに懐かしむような感覚が生まれてきました。九日間の日程でしたが、あっという間に過ぎ去ってしまいました。この九日間、正式な訪問日程も遊びも、そして農村での体験もとても充実していて、それぞれが忘れがたい思い出となりました。善光寺で極楽の錠前に触れ、灯明まつりを鑑賞しました。この思い出深い旅は台湾に戻ってからもずっと懐かしく思い起こすことでしょう。また日本を訪れる機会があればと思います。

そして、東京も長野も道路はとても清潔で、ゴミや汚れが少しも見られないことに気づきました。また、どこに行っても店員は親切で礼儀正しく挨拶し、顔には始終笑みが浮かべられていました。デパートの営業時間を過ぎてしまっても、店は優しく私たちを迎えてくれて、かねてから日本人は礼儀正しいと聞いていましたが、実際にこの目で見てそれが本当であることを知りました。

道路が清潔であることで思い出しましたが、歴史あるテレビ局や新聞社を訪問したとき、NHK、読売新聞、信濃毎日新聞社などは数十年の歴史を持つ組織であるにも関わらず、内部は美しさを保ち、建物の外観からも数十年という歳月は全く見いだせず、真新しいビルのように内部も同様にきちんとメンテナンスされとても良い印象を受けま

した。こうした品質へのケアがあるおかげで、日本のジャーナリストはよりよい職場環境を享受でき、仕事の質を高めることに役立っているのだと思います。

全体としてとても意義ある訪日で、帰国後もメディアの仕事に対して新たなことを学ぶことができ、今後記者という仕事に対して新たな考え方を持つきっかけになったと思います。改めて、交流協会からの心遣いと、今回の機会を与えて下さったことに感謝申し上げます。また、台湾と日本のマスコミ環境がもっと頻繁に交流し、コミュニケーションを取ることで、メディア環境がさらに向上することを願っています。